

何故、時間性能が全ての原因なのか？

日常生活で起こることには様々な原因がありますが、健康に関して免疫力に作用するのは食べ物や環境汚染物質などさまざまです。しかしアメリカの細胞学者ブルースリプトンさんは「思考のすごい力」の中で、人の意識が最も早く深く作用すると言っています。人の思いは強烈な電磁波ですから、細胞がキャッチする速度は体内の化学物質伝搬より圧倒的に早く伝わります。このことから意識のエネルギーがどのようなエネルギー構成になっているのか考えてみたいと思います。

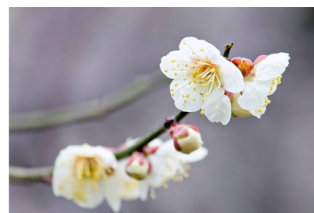
意識とはどのように確立してきたのでしょうか？

生まれたての新生児は言葉を話すことができません。最初は「あ〜」とか「う〜」とか音を発声します。小さな子はまず名（音）を覚えます。少しずつ単語を覚えしだいに話ができるようになります。「話」ができるようになると「字」を覚えます。次に数を数えることができるようになると、筋道たてて話をしたり、筋のおとる文章を書いたりできるようになります。物事と物事とを比較検討することによって、その中から違いを見い出すことができるようになります。次第に自我意識が確立してきます。

名付けられたものの用途や機能などの特徴を抽出して意味が成立し一つの概念として定着していきます。具体的には人と話をしたり、本を読んだり、テレビを見たりいろいろな経験することによって五感覚から外界の情報を「コトバ」情報として取り入れ蓄積していきます。蓄積された概念からそれぞれの物差し＝価値観が構築されてきます。それが自我意識です。自我意識は言語によって作られているのです。

花を見ていると仮定します。まず花を知覚し花の名（コトバ）と共に脳にインプットします。コトバ（名）は常に物である対象と結びついています。例えば「ウメ」とは「ウ」と「メ」という音と花である物質である梅とが結びついています。それが「語」の能らぎです。

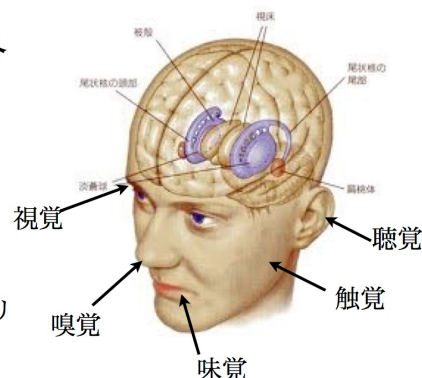
「ウメ」
音



物質

五感覚から取り入れる情報は、
全て**コトバ情報**と結びついて外
界の情報を取り入れます。

視覚	美しい花	→	ウツクシイハナ
聴覚	風の音	→	カゼノオト
触覚	熱いお湯	→	アツイオユ
嗅覚	梅の花の香り	→	ウメノハナノカオリ
味覚	美味しいお茶	→	オイシイオチャ



のように全てコトバ情報として取り入れていま
す。だから産まれたすぐの子供はまだコトバを
獲得していないので、自意識が未発達なのです。

名づけられたものの用途や機能などの特徴を抽出することで名（コトバ）の意味が成立し、それぞれが概念として定着していきます。具体的には人と話をしたり、本を読んだり、テレビを見たりといろいろな経験をすることによって、五感覚から外界の情報をコトバとして取り入れ、蓄積していきます。蓄積された概念からそれぞれの価値観が構築されてきます。それが自我意識です。つまり自我意識は コトバ でできているのです。コトバがなかったら人とお話をするこも、本を読んだり、テレビを見て笑ったり、泣いたり、感動したりできません。

自我意識は「コトバ」によって作られているので、どのようなコトバ情報をインプットするかで自我意識が形成されていきます。

最初のコトバの獲得は両親の会話です。両親の会話をまずインプットします。この場合子供はお腹の中でも、0～4歳くらいまでの幼少期でも、強制的に親のコトバが入ってきます。またおじいちゃん、おばーちゃん、親戚やテレビ、ラジオ、携帯等メディアからもどんどんコトバ情報が脳に流れ込んできます。

保育園、幼稚園に入ると他の子供や保育士さんの会話、親のお友達等様々な人や自然の生物、環境によって自我が確立してきます。

以下脳神経細胞学的なレポートから

新生児の脳の重さは約350gですが、成人では約1,300gまで成長します。成人になるまでに徐々に成長していると思われる方も多いかもしれませんが、実際には、脳の発達は0～2歳の時期に驚くべき急成長をとげます。

赤ちゃんの脳の発達は1ヶ月が大人の10年に相当すると言われています。そして、脳の大きさは3歳で成人の約80%、6歳で約90%まで大きくなると言われています。

【脳はどのように発達するのか】

新生児は脳に1000億の神経細胞（ニューロン）を持っていますが、神経細胞間の接続はまだ少ないようです。心臓や肺のような生命にかかわる領域での接続は完了していますが、それ以外の領域では未完のままなのです。

しかし、生まれて数ヵ月経つと、新しい結合（シナプス）ができて、代謝の活動も高まってきます。繰り返される刺激は、このシナプスの結び目を強くしていきます。

このようにして、2，3歳頃には約1000兆（※大人の約2倍）のシナプスを持つようになります。

一方、神経細胞（ニューロン）をとりまくグリア細胞は、どんどんと成長していきます。グリア細胞はミエリン鞘（髄鞘<ずいしょう>）というものを作って神経細胞を包み込んで保護する働きを持っています。これによって、神経細胞（ニューロン）どうしのやりとりが効率化されるのです。

脳がしっかりと働くためにはこうしたグリア細胞の働きが不可欠なのです。グリア細胞が脳全体にしっかりと行き渡ることによって、脳が発達を遂げるとされているのです。

1	初期の胎児の脳は、必要な数よりはるかに多い、約1000億個のニューロン（脳細胞）を作り出します。 余分なニューロン（脳細胞）はやがて取り除かれます。
2	この1000億個のニューロン（脳細胞）から、軸索（配線）が伸びて、別のニューロンに届き、信号を伝える仮のシナプス（結合）を作り出します。 この仮のシナプス（結合）は、実際に使われるよりも数兆以上も多く作られます。
3	電氣的な刺激（信号）が伝わると、シナプスは強化されます。 信号が伝わらなかったシナプスは退化していきます。
4	誕生後、赤ちゃんの脳では、第2段階の発達が始まります。信号が届くと、軸索と樹状突起との結合部（シナプス）が増えていきます。 感覚器官から入ってくる刺激による電気信号が、シナプスを残したり消したりしながら、脳の配線を仕上げていきます。

新生児は脳に1000億の神経細胞（ニューロン）を持っているそうですが、2，3歳頃には約1000兆（※大人の約2倍）のシナプスを持つようになると上記されています。脳生理学的に言うと、0～4歳までに脳神経細胞の爆発が起こるそうです。脳細胞神経の爆発的成長は情緒的に見ても、コトバの獲得に応じて情緒は安定してきます。

自我意識は言語意識で使われています。肉体の五感覚を通じて知覚される対象は自我意識によって認識され、概念として蓄積されていくため、言語の意識は

善、悪 陰、陽 明、暗 好き、嫌い……

のように相対的意味を持っていますから自我意識は必然的に相対的になります。相対的ということは差別的なので、意識は対立的であり差別的です。

意識はコトバによってつくられています、そのコトバがどのような特徴を持っているかで、人の性格も様々です。人の意識はコトバによって作られ、文化、文明も人によって作られるので、文化、文明もコトバによって作られているのです。世界には多くの言語がありますが、その言語の特徴によって国民性も文化も様々です。

文化という文字は「文が化けている」と書かれています、文は文字が連なった意味です。もちろん文字もコトバが眼で見えるようになったものです。文化もコトバによって作られているのです。人の意識、思考はコトバによって作られています。ですから

人とは何か？

を理解するには

コトバとは何か？

を知り、理解する必要があります。

例えば花の美しさを感じることができるのは、私達が花というコトバを知っているからです。もし花というコトバを知らなかったら花が何か認識できませんし、花を見て美しいと感じることはありません。

花を美しいと思えることは、「コトバ」があるからです。感覚にコトバが結びついて始めて認識されるからです。その蓄積によって人間らしい感情、情緒が養われていくのです。人間らしい感情が発露してくるのです。

又コトバ情報の蓄積によって様々な思考が可能になります。

言葉の本質を理解するには、言葉がどのようなエネルギーで構成されているのかを知る必要があります。言葉はエネルギーなのでその方の意思によってその方の行動や言動が決定され、人生を作り上げていきます。言葉の使い方によってその方の人生が決定づけられることになります。

例えば積極的な考え方や言葉使いをする方は積極的な人生を作ることになります、また消極的な考え方や消極的な言葉の使い方は消極的な人生を送ることになります。つまりどの方のどんな人生もその方が決めていることになります。人生という現象はその方の思い、考え方が決定しているのです。

どうすればより良き人生を送れるのかは、より積極的な考え方や言葉の使い方をすればより良き人生を送ることができるのです。

より積極的な考え方とは、起こってくる現象の捉え方においてもそうですが、現象の意味をより積極的、普遍的な意味に捉えることができると、限定的、相対的ではないので意識に対立的感情を抱かなくて済みます。普段は私たちが使っている言語を相対的、対立的意味で使っている所以对立的感情を生んでいるのです。

現象がどのような意味で起こるのかその原因の捉え方次第で、意識は対立的感情を蓄積しなくて済むので、自意識が現象をどのように捉えるのか？その捉え方の意味によって現象が変わるので

す。

私達は生活の中で様々な意味付けによって、物事の判断を行なっています。

これは好き、これは嫌い、これは善い、これは悪い、これはどちらでもない、……のようにです。人の行動はその人の意思によって行われています。私たちの意思は母親の体内にいる時から、作られていきます。成長に伴って生活環境から得た様々な経験、情報によって自意識の構築がなされ、12、3歳頃までにはある程度の物事の判断基準の基礎が出来上がります。全て経験による言葉の蓄積によるものです。

蓄積された言葉の意味によってその方の人生という現象が決まるのであれば、物事の捉え方の意味によって起こる現象が異なるので、「意味」が現象を決定づけていることになります。

「意味」とはどのようなエネルギー構造になっているのでしょうか？

日本語の場合音は命波音（76音）で構成されています。下記に音の構造を整理した「命波音種整理図」を示します。

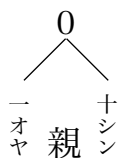
命波音種整理図



音は意味を持ちません。意味を表すのは日本語の場合、表意文字です。表意文字は音訓を有しますが、一文字で意味を表すことができます。日本語の表意文字は「立て、横、斜め、点」の4要素の幾何構造で構造されています。

オ 親

また次元的に捕らえると「意味」には奥行きとか広さとかがあるので、「3次元性格」を持ちます。例えば「深い意味」とか、「広い意味において」という意味で使うことができます。漢字は「3次元性格」を持ちますが、そこで小田野先生は漢字の音読み（中国読み）を（十）、訓読み（大和読み）を（一）として漢字の音訓に（十）と（一）を付けることによって、表意字である漢字の位置が『0位』になるようにされました。



このことは漢字（3次元性格）という表意文字の次元が

「3次元性能の表意字」＋「1次元性能のカタカナ」→「4次元性能の『完字』」

によって人類史上比類のない、4次元性能の『完字』の誕生になります。

4次元性能とは絶対無限界の仕組みを表す字能力になったのです。

漢字（3次元性能）の意味は相対的に作用しますが、4次元性能の「完字」は普遍的意味を表す字性能になったので相対的意味に作用することがありません。例えば悪という漢字の意味が4次元性能の完字の意味になると

現 ア 悪 空 ク

空の現われとなり、漢字の悪という意味とは全く違った意味になります。

「意味」が起る現象を決定づけているのであれば、3次元性能の漢字は相対的意味の現象を起こします。つまり対立的意識を生むことになります。ところが4次元性能の完字は普遍的意味を表すので起る現象は絶対無限愛として作用します。

対立的意識の極みは人間中心の世界観ですが、正に今の時代がそうです。長い時間かけて私達人類は地球環境を破壊し、私達の都合の良い世界を作ってきました。異常気象によって近い将来食料飢饉が起こる可能性があり、現在は40億の人が飢えに苦しんでいるそうです。食物連鎖が途絶え、100万種の絶滅危惧種を作ってしまいました。

文字の意味を3次元性能の漢字から4次元性能の完字の意味に読み替えることを「字分け」と言いますが、意識を作っている「意味の捉え方」によってどのような意識になるのか決まります。

対立的意識の意味を字分けによって普遍的意味に読み替え、重ねていくと意識が徐々に変化し、意識の意味を読み替えるので、文字どうり意識が普遍的意味に移行して行きます。

字分けによって私達の対立的意識が普遍的意識へ甦るのです。

普遍的意識を持った人々が増えると、人中心の世界観が大自然法則に則った世界観に変わり始めます。

相対的意味によって対立的感情が作られ、普遍的意味によって絶対安定の「完情」が成立します。意味によって起こってくる現象が決定づけられます。

このことは時間性能と空間現象の関係性と一致しています。

簡単な実験をしてみましょう。両手を擦りあわせてみて下さい。手が「動く」とシュシュといった「音」が聞こえ、さらに手が「暖かく（＝温度）」なってきます。このように「動きと温度と音」は三位一体で存在します。

物質が小さくなればなる程、回転する速度は早くなります。逆に考えてみると、回転速度によってそれぞれの物質の形状が決定されるのです。

太陽	20Km/sec
地球	30Km/sec
原子	1000Km/sec
陽子	10万Km/sec

動き（回転速度）によって物質の形状が決定されるのです。つまり動き（回転速度）によって現象が決定されていることは、時間性能（動き）という原因で空間現象という結果が起こっていることになります。

意味の捉え方（性質）が概念による相対的意味によって起こってくる現象は人中心の世界ですが、普遍的意味によって大自然法則に則った世界が現象してくるのです。もちろん自然は最初から大自然法則にしたがって運営されて、地球の自然現象を作られてきたのですが。

このことから意味は時間性能であり、意味の性質、内容によって起こってくる現象が違ってくるのです。より普遍的な意味を理解することが、大自然法則に則った世界を創ることになるのです。

今地球環境をこれだけ汚染したのは、私達人類の意識が生産性中心、もっとわかりやすく言うとお金中心なので、私達の都合の良い社会を創ってしまいました。

地球環境を本来の大自然法則に従った状態に変えるには、まず私達が考え方を変える必要があります。お金中心の世界観から大自然法則をベースにした世界観へ変わらなければなりません。

私達の考え意識によってこの地上の人類社会を築いてきましたが、その考え、意識が人中心の考えによって営まれていたためにこのような地球環境になってしまいました。私達の意識が「コトバ」によって作られ、その「コトバ」で私達の意識、考えができていること、さらにはその「コトバ」のエネルギーがどのようなエネルギー構造になっているのかを知り、理解する必要があります。

何故ならそこには私達のルーツがあるからです。

2020年4月25日15時33分 八田光典